HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	商における日本と西欧諸国の中世史序論（前編） ― 15世紀あたり日本はマーケティングの発達した世界有数の国の一つであった ―
著者	黒田，重雄；Kuroda，Shigeo
引用	北海学園大学経営論集，22(1)：49-70
発行日	2024-06-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《研究ノート》

商における日本と西欧諸国の中世史序論（前編）

── 15 世紀あたり日本はマーケティングの発達した世界有数の国の一つであった ──

黒　田　重　雄

目　次

はじめに（商とは全事業をあらわす言葉である）
1．商に関連する各国の中世期における社会的文化的特質について
1－1. ヨーロッパ中世の特質
—キリスト教の台頭—
1－2. 日本の中世における宗教
1－3. 阿部謹也の「世間」における日本と欧米の相違について
1－4. ビッグ・クエスチョンの一つ：ビジネスと贈与
1－5. 西欧社会では中世期において「贈与」が消えている—キリスト教の流布と関係—
1－6. 日本の「贈与」慣行について
—仏教とは無関係—
2．中世期における日本とヨーロッパ諸国における「商」の比較
2－1. ヨーロッパの中世期における商
〈以下次号（2－2. 日本の中世期の商）〉
前編の〈注と参考文献〉

はじめに
（商とは全事業をあらわす言葉である）

本拙稿では，「商」と「商業」の言葉を区別して使用する。

「商とは何か」といった場合，日本では，まず総務省統計局の定義である「商業」（卸・小売業）が念頭に浮かぶが，本拙稿ではその定義は採用していない。

「商」とは，「ビジネス」のことである。以下に，そのことを説明する。

フランス語の“commerce”は，もともと「農業以外の事業」を指す言葉であった。つまり，フランス，ドイツなどのヨーロッパで16～7 世紀あたりに生まれた“commerce”（以下，コマース）という言葉が，日本では「商業」という訳語を当てることが多い。しかしながら，このときのコマースは，外国との交易のメリットを重視するもので，それに携わる商人たち（「農業以外の事業」を営む人）に対して，外国商人と取引（交易・貿易）を行うに際しての方法や要注意事項を列記した，いわば「取引のハンドブック」の意味合いを示すものであった[1]。そう考えると，コマースという言葉は，卸・小売業という狭い意味をあらわす言葉ではなく，事業全体をあらわす言葉，（現代では）「ビジネス」であったということである。

したがって，本書では，

〈商＝コマース＋農業＝ビジネス〉

と表わしたいと考えている。つまり，現代におけるすべての事業（農業も含む）行動を「商」とし，したがって，「商業」の定義は，「卸・小売業」となる。

“*marketing*”（マーケティング）は，20 世紀初頭のアメリカで生まれた言葉である。戦後すぐに敗戦国日本に土足で入り込んできた（積極的に受け入れた）感があるが，10 年間年率 10％という日本の超高度経済成長を牽引したのは「マーケティングのお陰が大きい」ともてはやされてきた。しかし，導入後

70 年を経て，経済状況の長引く停滞・不況もあり，今や少々陰りが見えてきている。社会学者なども，「マーケティング化する民主主義」とか「マーケティング至上主義」とかの言葉も生み出して，まるで「諸悪の根源はアメリカ流マーケティングにある」と言わんばかりである。確かに，「私の会社では，マーケティングは行ってはおりません」と言うところまで出てきている。

今や，「アメリカ流マーケティングがだめなら，日本のマーケティングは，あるのか，ないのか」という問題が浮上し，その解決が迫られている。

このことについては，筆者は，日本の「商」に関わる古代からの歴史を俎上に乗せ，「商」とは何か，それがどのように現代に受け継がれてきているかの研究が欠かせないと考えている。

日本における「商」に関わる「流通論」などでは，ほぼ江戸時代あたりからの考察が中心である。調べてみると，日本における「商」は，鎌倉・室町あたりで非常に活発化していたことが分かってきている。

日本のマーケティングを考える基本は，日本人とは何か，他国に比して日本の特性は，どこなのか，といった点の解明が欠かせないが，筆者は，こうした日本の特性を「商」に求めたいと考えている。

その理由は，日本においては，「商」の研究が薄かったことが，ストレート（無批判）に研究や実務にアメリカ・マーケティングが導入されたと考えているからでもある。

1．商に関連する各国の中世期における社会的文化的特質について

1―1. ヨーロッパ中世の特質
―キリスト教の台頭―

まだアメリカの生まれていない頃，つまり中世期のヨーロッパの商は，“commerce”であった。では，中世期のヨーロッパ諸国は，どのような国民を抱えていたのだろうか。

西洋経済史家の増田四郎は，著書『ヨーロッパ中世の社会史』（講談社学術文庫，2021 年）を表し，その中の講で，「中世西ヨーロッパ社会に共通した特質 13-16 世紀」について書いている[1]。

いわゆる「中世的世界経済」と「都市経済」（pp.195-201）

要するに，12 世紀を転期として，麻織物・毛織物・葡萄酒・穀物等々，特産物化の傾向が現れ，都市と農村の有機的な関係ができるとともに，物資流通のシステムが，だんだんと全ヨーロッパに拡大し，ヨーロッパが単一価格体系の場となるというのが，東ヨーロッパとくらべての西ヨーロッパの特色であります。東ヨーロッパでは，市場への窓口を閉ざされた村落であり，価格体系の不明な外地の奢侈品が，いわば農村の頭越しに，貴族階層の需要のために流通する，という傾向が圧倒的に強いのであります。

そこで経済史家たちが，こうした西ヨーロッパの状況をどういうふうに見てきたかということを，11 世紀ないし 14 世紀の把え方の問題に結びつけて申し上げてみたいと思います。ご承知の方が多いだろうと思いますが，従来の経済史の概説書では，この時代の経済状態を，「都市経済」の段階として規定してきました。その意味は，封建諸侯が，自分の領域全体の経済の発展を促進させるような政策をまだ自覚していない。別の言葉で言いますと，経済主体というものは，あくまでも都市自治体であるという，そういう状態でありますため，このように規定したのであります。

この把え方にはそれ相当の理由があるのでして，「国民」というものが経済主体になって経済政策が行われ，国民の富を増やすための諸政策が行われるという段階を「国民経済」

と呼ぶのと，相呼応しているのです。すなわち，国民経済が出現する前段階を都市経済と考える。，基本的には，都市というものが，11ないし14世紀においては，他の何ものにも増して顕著な経済主体であったとみてよいと思います。

（筆者注：この都市国家間の厳しさを今に伝える代表的都市は，現在フランス南部のオード県にある街「カルカソンヌ（Carcassonne）」である。古代ローマ時代にあったという要塞（石塀）は中世期には，その外側にもう一つの要塞が造られ，二重要塞の防備が施されている。そこは小高い丘の上にあり，中心には寺院や広場があり，人々は，昼間は，丘を下って平地での農業を営み，暗くなると2重の塀の中に戻って休む，という具合であった。）

ヨーロッパ中世史を研究する阿部謹也は，ヨーロッパでは，11世紀を境にして，キリスト教が急速に広まったという[(2)]。

キリスト教は個人の宗教です。（p.91）

キリスト教が政治と一体化するのは，カール大帝（シャルルマーニュ）のカロリング・ルネッサンスがあったという8，9世紀に遡ることができます。彼の政策を理論的に武装しようとしたのだと思います。

カールの目的は，キリスト教の教義と合致したかたちでフランクの社会を変革していくことであったと思います。それはなぜか。古代ローマ地中海文明の力だと思います。ローマ帝国を形成した文化の力の根源に，彼はキリスト教を見て，この力を使わなければならないと考えたのだと思います。古代文明の技術やさまざまな政治制度等々を見て，フランクをそういうかたちで，当時から見れば近代化することが目的であったと思われます。

つまり，カール以前のフランクの社会が自然のさまざまな力や慣習や経験や伝統や歴史などの働きの中でつくられていたとすれば，カールの提案はキリスト教の教義の権威のもとで社会をつくりあげようとするものでした。キリスト教の教義に基づいて一つの社会をつくろうなどということを本当に考えたとすれば，大変なことです。

社会形成の自然のかたちというものは，ここでは神に由来する規範とか公理，原理に服せしめられることになりました。この点は，その後のヨーロッパの性格を決定的に規定したものとして注目すべき点だと思います。つまり教会の学問，エクレシオロジーが世俗政府の中枢におかれたことになります。

現代では，学問や芸術は，政治や権力から一定の距離をおいていとなまれることが一応前提とされていますが，しかしこういう前提は比較的最近のもので，中世初期においては学芸は政治と非常に深い関係をもっていました。カロリング時代の国家と教会も深くかかわっていたのであって，国家と教会が政教分離になるのはずっと後の話です。

この世は何のためにあるのかが問題で，今のわれわれには信じがたいことかもしれませんが，この世というのは本来，彼岸，あの世の準備としてあるのであって，現世の問題と彼岸の問題が結びついていたのです。

（筆者注：流通論で名高い田島義博教授の講義で，「アメリカではキリスト教の国である。そこでは，人はいくら頑張っても神になれない，だめな人間だ，そのだめな人間が救われる道は，ただひたすら働くしかないのだ，それが人の贖罪だ，そして，余ったお金は貧しい人のために寄付（donation）（贈与とは違う）するのだ，そうやって働くだけなのが人間存在である，そうしたものがアメリカ・ビジネスやビジネスライクの言葉の根底にあるのだ」と述べていたことが頭に浮かぶ。）

1－2. 日本の中世における宗教

経済学者の寺西重郎は，日本とイギリスとの比較において，それぞれの国の宗教変化への対応が，両国の経済行動と経済システムに極めて対照的な結果をもたらしたことを論じている。その上で，現在の日本の経済システムの根柢には，鎌倉時代に興った新興宗教があると述べている[3]。

日本の鎌倉時代に始まる新興宗教といえば，法然の浄土宗，親鸞の浄土真宗，道元の曹洞宗，栄西の臨済宗，日蓮の日蓮宗，一遍の時宗などがそれに相当している。

この中世における日本の宗教の勃興については，日本中世史専攻学者と宗教学者との対談形式の本である，本郷和人・島田裕巳（2024）『鎌倉仏教のミカタ―定説と常識を覆す―』が参照される[4]。

（pp.3-4）

戦前の日本史学は，鎌倉時代に誕生した仏教を高く評価しました。法然，親鸞，一遍と続く浄土の教え（浄土宗系）。厳しい修行で知られる禅宗と武士の結びつき，それらの隆盛を弾劾して蒙古（モンゴル）襲来を予言した日蓮の激しい布教活動。鎌倉時代の到来は，仏教の新しいムーブメントの登場と軌を一にしていました。鎌倉時代を知るために，また日本人の精神を知るために，歴史研究者は鎌倉新仏教に注目したのです。

これに対し，戦後の京都の研突者たちは，根本的な批判を試みました。それは鎌倉時代そのものの見直しと連動して提起され，仏教と政治・経済の連関に新たなイメージを与えたものであったがゆえに，説得力を持ちました。

彼らの説くところでは，鎌倉幕府の成立と維持は朝廷あってこその動きであり，この時代の展開は古代と同じく，天皇の王権と京都を中心として解析しなくてはならない（その結果が「権門体制論」）。中世の精神世界を構成する大きな要素であった仏教の動向もまた，基軸は京都に求めるべきである。すなわち，仏教の太い幹は依然として天台宗・真言宗の密教であり，鎌倉新仏教は枝葉なのだと主張したのです（「顕密体制論」）。

こうした研究史を踏まえ，私は民衆の側からの視点を取り入れて，鎌倉仏教の再評価を試みました。武士という存在の本質をどうとらえるべきか。すなわち，京都とのつながりを重んじる地方官とするのか，それとも地方・地域のリーダーと見なすのか。その議論に決着はついていませんが，私は室町・戦国時代への展開に配慮して，後者の視点を重視します。この時，武力を表看板とする武士たちが，なぜ地域の農民をよりよく統治することに目覚めていったのか。そこに仏教の影響を見ようとしています。

ただ，私のこうした取り組みは表面的，上っ面なものにすぎないようにも感じられます。仏教は人間が生きるための道具であり手段ではありますが，精神こそ肉体の主人であるとの視点が容易に成立することを考慮すれば，当時の武士，また古代に比べて飛躍的な社会進出を果たしつつあった庶民の精神世界こそが，彼らの行動を規定しているとも受け止められる。そうであるならば，中世社会をより深く知るために，学問としての仏教ではなく，彼らのなかで実際に生きていた仏教に近づきたい。私はそう念願するようになりました。（以上，本郷）

ちなみに，京セラ・第二電電（現 KDDI）の創業者でもあり経営者として名高い稲盛和夫氏は，臨済宗（円福寺）の在家僧侶である（法名：大和）。

また，仏教学者の鈴木大拙は，「東洋的見方」は「禅である」と書いている[5]。

何かの因縁だろうが，自分は「東洋的見方」ということを強調したくでしょうがない。こ

れを今時の西洋的，科学的，論理的，概念的などいうものに対抗させて，東洋民族はいうまでもなく，欧米一般の人々にも，広く知らせて，東洋文化の意義を高揚したいのである。そうしてこれを，これから来たるべき世界文化なるものを造り上げるに，一役つとめさせなくてはならぬというのが，自分の主張なのである。

東洋的見方のうちで，最も特徴ありと認むべきは禅である。この禅を，今までの様式そのままで，これからも広く世に行なわせるべきかどうかは，問題であろう。が，一応はまず何が禅かということを，できるだけ平易に説き明らめるのが，自然の順序である。

1－3. 阿部謹也の「世間」における日本と欧米の相違について

まず，「商」と関係が深い，「世間」について考えて見る。比較社会史の研究で名高い阿部謹也の「世間」を要約すると，以下のようになる[6]。

日本には「世間」があり，欧米にはない。欧米では 12 世紀以降「個人」がうまれ，日本には明治維新後に欧米の思想や技術と一緒に「個人」も入ってきた。この場合，日本では個人が世間に拘束されており，欧米にはないものである。

もう少し具体的に，「世間」についての，阿部の見解を見てみよう[7]。

阿部によると，日本社会もヨーロッパ社会も，もともと，「世間という独特な人間関係が支配的な」社会であったのが，ヨーロッパだけが，11～12 世紀を境としてそうした社会から離脱した，というものである。これは，キリスト教が全ヨーロッパに広がり出した時期と一致するという。

そのことは，8～9 世紀に萌芽が見られるとしている。その辺のことを，第 2 講で詳しく説明している（pp.66-133）。

まず世間の解体をもたらした一番大きな原因は何かというと，キリスト教の普及であったと私は思っています。

ルカ伝にも「だれでも，父，母，妻，子，兄弟，姉妹，さらに自分の命までも捨てて，わたしのもとに来るのでなければ，わたしの弟子となることはできない」（ルカ伝 14 章 26 節）とあります。これもすごい言葉で，自分のところにきて父，母，妻子，兄弟，姉妹を憎まないような人間は自分の弟子になれない。つまりすべてを捨てて自分に従え，親や兄弟を捨ててしまえということです。

もちろん日本にも，孝養をつくすことなど必要ないといった親鸞のような人もいなくはないですが，そういう絶対的な命題のようなものを根底においた，そういう宗教はなかったといってよいでしょう。

さらに，阿部は述べる。

一人一人の彼岸への準備としてこの世があり，そこに国家の役割があるのだという，観念的といえば観念的ですが，そういう理解が公式の理解でした。これは現代にまで多少受け継がれていますが，日本には，そういう考え方は全くなかったと思います。こういう動きの中で，個人の覚醒が始まってきます。

（筆者注：空海の密教では，現世を問題している（自己の力を存分に発揮すべし）[8]。）

「世間」は，人間が集団の中に埋没して相互に依存し合う集団優位の世界，新しいヨーロッパは，個人を単位として結合するという固有の意味での社会である。

日本は，前者を引きずっており，ヨーロッパの流れを汲むアメリカは，後者の個人を単位で結合した社会と考えることもできる。

こんなにピタッと分かれるものではないかもしれない（日本では，犯罪を犯した若者の両親が出てきて世間様には申し訳ないことをしました，とあるのが普通だが，アメリカの東海岸の大学では，あの人は離婚しているので教授になれないのだ，という噂が出ていたが，これも世間体を考えてのことではないかと考えている）。しかし，筆者なども実際に欧米で数回，家族とアパート生活をしてみた経験から（ほとんどが一年以内の短期ではあったが）確かにそういう感慨を持ったことがあるのも事実である。

したがって，そうしたものが底流にあるとすると，表向きは同じような法的措置であっても，その解釈や運用については，違った受取りが出てきても止むお得ないのかもしれない。

日本語の「公正」や「公平」概念と英語の“fair”や“justice”との関係が，上記の社会の仕組みや考え方と密接に結びついていることは十分あり得ることであろう。

こう考えると，日本では，人様には迷惑を掛けない，正直であれ，信頼をモットーとせよ，等となる（これが世間に対する「公正」の意味である）が，欧米においては，個人同士の間での「公平」が第一であったということも頷ける。つまり，欧米の「正義とか道徳」は，宗教上の禁欲という形で個人を支配していたので考える必要がなかったということかもしれない。

この日本における「世間」の存在については，ルース・ベネディクトの『菊と刀』にも出てくる。『菊と刀』の「第 7 章　義理ほどつらいものはない」で，日本人の「義務と義理」の違いについて述べている[9]。

1－4. ビッグ・クエスチョンの一つ：ビジネスと贈与

もう一つ，「商」と大いに関係のある，「贈与」や「互酬性」について考えておきたい。

雑誌『現代思想』（2024 年 1 月号）で，「ビッグ・クエスチョン（大いなる探究の現在地）」という特集を行っている。「愛するとはどういうことか？」，「美しいとはどういうことか？」，「人は死んだらどうなるのか？」，「人はなぜ宇宙を目指すのか？」，「神の存在は証明できるのか？」などと並んで，実業家で文筆家の平川克美が，「お金で買えないものはあるのか？」というテーマで書いているが，これは「贈与」の問題である，と述べている[10]。

1－5. 西欧社会では中世期において「贈与」が消えている ―キリスト教の流布と関係―

今日，歴史家の伝える「中世」という時代の日本とヨーロッパ社会においては，「贈与」とか「互酬性」のあるなしで示されるという。

たとえば，経済史専攻の大月康弘によると，中世期のヨーロッパ社会においては，それまで盛んに行われていた「贈与」（「互酬性」）が消えたという。それは，キリスト教の浸透と深く結び着いた結果であると言う[11]。

ヨーロッパの「贈与」について

ヨーロッパの「贈与」に関連しては，阿部謹也（2017）『中世の窓から』が参照される[12]。

キリスト教と贈与慣行

キリスト教はパレスチナで成立したとき，すでに当時のユダヤ社会における贈与慣行と深くかかわっていました。たとえばルカ伝第 14 章 12 節から 14 節にかけて，次のような言葉があります。

「またイエスは自分を招いた人に言われた。午餐または晩餐の席を設けるばあいには友人，兄弟，親族，金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招き加えし，それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ宴会を催すばあいには貧しい人，体の不

自由な人，足の不自由な人，目の見えない人などを招くがよい。そうすれば彼らは返礼ができないから，あなたはさいわいになるであろう」。

これは明らかに当時の贈与慣行を前提としながら，その原理をとりこんでイエスの彼岸思想を理解させようとしたものとみることができます。つまり宴会に呼ぶのも贈与であり，贈与に対してはお返しがくるのが当然のこととなっています。目の見えない人や貧しい人に贈り物（招待）をしたばあい，お返しはこの世では貰えませんが，贈った人の善行として天国でお返しがくると説かれ，イエスは贈与慣行を用いて彼岸への準備を説明しているからです。

かっては多くの財を散ずることが富者，上位者の条件でしたが，今や財を散ずる方向はもっぱら教会や修道院あるいは貧民への喜捨などに向けられるようになります。かつて首長は臣下を集めて大盤振舞いをして，宴会を開き御馳走することによって人的紐帯を結び，首長たる地位を確保していたのですが，今や教会や修道院の建設に財を寄進し，天を摩する大伽藍というシンボルを通して，神との贈与関係によって，抜きん出た地位を保証された者という権威を確保してゆくことになります。国王や貴族が教会に寄進するのは神の栄光と自分の霊の教いのためですが，多額の寄進者にはそれだけの恩寵が与えられることになり，それによって一般人から抜きん出た地位を確保することができるのです。大聖堂の建立趣意書や贖宥状に，「私個人のためではない」とか「はかない名声を得ようとするためではない」などという言葉がみられるのは，まさに散財の方向の転換を示しています。「貧者を保護し，その避難所とするために」大聖堂を建立したという文章などもそのことを示しているのです。**大聖堂の建立は富者による伝統的な一般的贈与の転換した形だったのです。**

1－6. 日本の「贈与」慣行について
―仏教とは無関係―

日本における贈与慣行は，今だに続いている。「御中元」，「御歳暮」などはその典型である。

日本の中世史専攻の桜井英治の「日本の贈与慣行」に関する見解が参照される[13]。

> 日本の中世社会を理解するさいに贈与という観点が不可欠であろうということは，政治史であれ，文化史であれ，およそ当該期の歴史研究にかかわっている者なら，みな経験的に察しているはずである。
>
> 流通史，すなわちモノの流れの問題を研究の大きな柱のひとつにしている私にとっても，商品としてのモノの流れと収取物としてのモノの流れという，古くから議論されてきた二つのモノの流れに加え，いまや贈与によるモノの流れの問題がほとんど無視しがたいものになってきているのである。
>
> しかしそれは，贈与が商品流通に勝るとも劣らないほど大量のモノの流れを生み出していたというような，量的な事柄を問題としているわけではかならずしもない。むしろ私の関心はそれとはまったく逆のところにあるといったほうがよい。すなわち，**日常的にくりかえされる贈与のなかで，いかにモノが動いていなかったか，かぎられた現物でいかに多くの贈与がこなされていたか，という点に私はむしろ大きな関心を覚えるのである。**
>
> 室町時代になると，贈与の後日決済や贈与どうしの相殺，あるいは贈られた品をそのまま別人への贈与に流用するといったたぐいのことが何のためらいもなくおこなわれるようになる。つまり現象面からいえば，市場経済にみられるのと同じような計算や信用，打算といった観念が，この時代，贈与の世界にも入りこんでくるのである。それが市場経済における計算・信用等の観念とどのような関係にあるのかについての本格的な検討は，これ

からの作業になってこようが，人格的な関係であることがひとつの定義ともなっている贈与の世界において，このような非人格的な観念が発生してくるというのは，おそらく贈与社会が行き着くべきひとつの極限段階を示していると思われる。

それが日本史における中世，なかんずく室町時代のきわめて突出した部分でもある。

（筆者注：今日の，「政党派閥の政治資金パーティ裏金事件」もこれに類したことと理解される）

贈与が非人格的な関係に転化するとき，そこに随伴する現象として，贈与の税への転化かおこりうる。その第一波といえるのが，大津透が「無色透明な租税」の成立と形容した，平安時代中期におけるミツキから官物への変化であり，贈与の租税化という点でいえば，これが歴史的にもっとも大きな事件であったことは疑いないが，ただこれに類する現象は中世を通じてくりかえし継起してくるのである。

元来，贈与の研究は文化人類学の仕事であった。伊藤幹治の『贈与交換の人類学』（筑摩書房，1995 年）や『岩波講座現代社会学 17 贈与と市場の社会学』（岩波書店，1996 年）等によって，贈与をめぐる最近の文化人類学の議論が比較的容易に把握できるようになったのは，私たち日本史研究者にとってたいへんありがたいことである。

ただ日本の文化人類学者が，肝心の日本については近代だけで議論を構成し，**贈与慣行の宝庫ともいうべき中世社会**についてほとんど触れるところがないというのは何とも不可思議な話である。

以上，アメリカ・マーケティングを，ダイレクトに日本社会に持ち込むことには大なる問題があったということである。

2．中世期における日本とヨーロッパ諸国における「商」の比較

ヨーロッパの中世以前の商史の概観

商人の登場

互恵的な交換は，やがて特定の人あるいは集団が何らかの価値を生産して，他者・他集団とやり取りする「取引」へと変化していったが，取引の中心的役割を担ったのは，一般に「商人」や「商業者」と呼ばれる人たちである。

古代では，貢物の仲介者，または毒見をするものが現れ，それが原始的商人の始まりとする説もある。しかし，基本的には，取引範囲が拡大するとともに遠隔地からのモノを自らが手に入れることが困難な場合，誰かに肩代わりしてもらう必要性が生じ，その結果，商人の出現を見たというのが，最も受容可能な見解であろう。

商人の定義としては，一般に，「商人とは，商品を自ら消費せず，利益を得て再販売することを目的とし，継続的・専業的に商取引を行うもの」が用いられている[14]。

商人（マーチャット：merchant）の出現も早い時期からと考えられる。紀元前 3000 年頃のメソポタミヤの商人（damker）は，既に一端のマーチャントたる性格を具備し，その頃の都市国家（ウル，ウルク，ラルサ，ニップールなど）において以下のことを行っていた[15]。

取り扱い商品は，羊毛，香辛料，ソーダ，銀，香油，さらに奴隷など非常に多岐にわたっていたし，店舗の賃貸借も行っていた。事務に習熟し，通信文も取り交わしていたという。すなわち，契約の締結，訴訟も行い，「口約より決済まで」（From mouth to money）を実行していたのである。

紀元前 3 世紀から紀元後 3 世紀にかけて（6 世紀にわたって），地中海商業の黄金期を

迎え，古代マーチャントの地位絶頂にあったが，後にローマ人により滅ぼされる。

また，地中海商業も，西ローマ帝国の衰退とともに古代末期から中世初期にかけて退潮するが，中世中期には，スペインやポルトガルによるアジアや新大陸の植民地を中心とする外洋航海や遠隔地貿易が盛んとなる。貿易が国益の中心となり，国家を背景とした商業的貿易が進展していった。

2―1．ヨーロッパの中世期における商

筆者は，まだ，アメリカ合衆国が生まれていない頃の中世期の西欧の「商」を考えている。

増田四郎（2021）は，中世期（11 世紀～15, 16 世紀あたり）のヨーロッパの商の状況について考察している[16]。

> 要するに，十二世紀を転期として，麻織物・毛織物・葡萄酒・穀物等々，特産物化の傾向が現れ，都市と農村の有機的な関係ができるとともに，物資流通のシステムが，だんだんと全ヨーロッパに拡大し，ヨーロッパが単一価格体系の場となるというのが，東ヨーロッパとくらべての西ヨーロッパの特色であります。東ヨーロッパでは，市場への窓口を閉ざされた村落であり，価格体系の不明な外地の奢侈品が，いわば農村の頭越しに，貴族階層の需要のために流通する，という傾向が圧倒的に強いのであります。
>
> そこで経済史家たちが，こうした西ヨーロッパの状況をどういうふうに見てきたかということを，十一世紀ないし十四世紀の把え方の問題に結びつけて申し上げてみたいと思います。ご承知の方が多いだろうと思いますが，従来の経済史の概説書では，この時代の経済状態を，「都市」経済の段階として規定してきました。その意味は，封建諸侯が，自分の領域全体の経済の発展を促進させるような政策をまだ自覚していない。別の言葉で言いますと，経済主体というものは，あくまでも都市自治体であるという，そういう状態でありますため，このように規定したのであります。
>
> この把え方にはそれ相当の理由があるのでして，「国民」というものが経済主体になって経済政策が行われ，国民の富を増やすための諸政策が行われるという段階を「国民経済」と呼ぶのと，相呼応しているのです。すなわち，国民経済が出現する前段階を都市経済と考える。一部の論者は，都市経済と国民経済の中間に，「領邦経済」の時代を考えますが，三段階説をとる人は，封鎖的な家族経済・都市経済・国民経済というふうに分けるのです。

2―1―1．イタリアの中世における商

ヨーロッパの中世の「商」についてはイタリアが活躍したことは，西洋経済史を専門とする玉木俊明（2023）『商人の世界史』に詳しい[17]。

> 11-12 世紀になると，イスラーム勢力が徐々に地中海から退いていき，イタリア商人の力が強まった。
>
> また農業面では，ヨーロッパでもともとおこなわれていた二圃制農業（小麦の冬作と休閑を繰り返す農法）に代わって，春耕地・秋耕地・休耕地に分けて三年周期で輪作をする三圃制農業が普及し，農業生産力が向上することになった。
>
> イタリアが本格的に香辛料貿易を拡大させたのは，14-15 世紀頃のことである。しかしながら，商業の復活によりイタリア都市が発展し，その要因の一つにレヴァント貿易があったうえに，中世のイタリアの繁栄には香辛料貿易があったと推測されているのだから，ここで香辛料貿易について目を向けたい。
>
> 香辛料貿易で，イタリア商人はたしかに大きな利益を獲得した。しかし，この貿易については，イタリア商人の輸送するルートが，

アレクサンドリアからイタリアないし地中海にほぼ限定されていたという事実に目を向けるべきであろう。

イタリア商人は，ヨーロッパ内部で最大の中間商人にすぎなかったのである。

14 世紀のイタリアについては，小林功・馬場多聞等の『地中海世界の中世史』に書かれている[18]。

経済的に豊かで自立した都市部の中では，文化活動も活発化レ 14 世紀頃からイタリアは本格的なルネサンス期に入った。

またこの問，イスラーム地域との交易も活発に行われていた。12 世紀末にイベリア半島南部からメッカに巡礼したイブン・ジュバイル（1145 年生–1217 年没）は，早くも往路・復路ともにジェノヴァ船を用いていた（第 6 章参照）。ムワッヒド朝末期から，アンダルスではアンダルス商人の船が往来することは少なくなり，代わってジェノヴァ商人をはじめとするキリスト教徒の船舶が大きな役割を果たすようになっていく。中世後期のナスル朝グラナダ王国では，ジェノヴァ人は一層重要な役割を果たす。彼らはサトウキビや乾燥果実，絹などをグラナダ王国で買い付け，代わりにイングランドやフランドルの毛織物や東方の香辛料をもたらした。また，ナスル朝のマグリブからの穀物輸入もジェノヴァ商人が担っていた。ジェノヴァはレヴァント貿易でも大きな役割を果たしている。

こうして，14 世紀にはイベリアだけではなくマグリブのイスラーム牧園の分裂や衰退が進み，地中海西部では，アフリカも含んでキリスト散開の優位が確立していった。また，キリスト牧園の再編が進み，カスティーリャの中央集権化とアラゴン連合王国の分権化，北イタリア都市の成長と市部イタリアの衰退という，近世から現代にまで及ぶ状況が形成されていった。

イタリアの商の活発化については，文豪ゲーテの戯曲『ファウスト』に出てくる台詞が「商，戦争，海賊」の三位一体説で表されている[19]。

また，経済学者の岩井克人（1985）『ヴェニスの商人の資本論』によれば，シェークスピアの戯曲『ベニスの商人』もヨーロッパ中世の世相を表すものと考えられている[20]。

『ヴェニスの商人の資本論』では，「利子とか利ザヤ」の発生が資本主義の萌芽とみていると思う。つまり，「分配に関する意思決定のあり方」については定義の中には入ってこないと考えている（暗黙には，入っていると考えても不都合は生じないと思うが）。

したがって，小生は，「利子」概念だけからいえば，日本にはかなり古くからあったと考えているということなのである。

2—1—2. イギリスにおける中世の商

『日本の最終講義』という本を読んでいて，考え深い箇所にぶつかった。それは，西洋経済史の泰斗である大塚久雄教授が東京大学の最終講義で，「イギリス経済史における 15 世紀」という題で述べている文章である[21]。この中で，大塚は，以下のように述べている。

まず，諸君が「経済史」の講義で聞いてよく知っていることから始めることにします。十四世紀の後半になると，イギリスの農村地域では例の「コミュティション」，つまり農民の賦役労働の金納化が進展しはじめ，それに伴って，それまでイギリス封建社会の基礎を形づくってきた土地所有関係，すなわちあの「マナー」の制度も解体しはじめることになります。マナー制度の中心をなしていたのは，領主の直営耕地といいますか，そうした「ディメイン」ですが，領主はマナーの内部に住む農民たちの賦役労働によってそれを経営していたわけです。ところが，賦役労働が金

納化され，しかもその貨幣で肩入れようとする「日雇」の賃銀がさまざまの原因によって── そのなかには疫病の流行によって農民人口が激減したこともありました ── いちじるしく騰貴したのです。

こうしたなかで，一方農民たちのあいだにはさまざまな種類の手工業，とりわけ毛織物の製造がますます広まり ── そうした傾向は早くも十三世紀のうちに始まっていた ──，彼らはしだいに裕福になるとともに，そのなかから事実上独立自由な自営農民（いわゆるヨウマン）も姿を現わしはじめ，他方，ディメインの経営にいきづまった領主たちは，それを分割し，裕福な農民たちに貸しつけて地代をとることを始めた。こうして旧来のマナー制度は急速に解体し，十五世紀の半頃には，それはもはや見紛うべくもない現象となっていたのでした。

そればかりか，こうした農村地帯におけるマナーの解体に並行して，旧来のいわゆる中世都市（ギルド都市）でも経済的衰退がみられたのでした。この「都市の衰退」という現象はなお三，四世紀にもわたって進行しつづけることになるのですが，その傾向が十五世紀に入るとともにはっきりと現われはじめたというわけです。その重要な原因の一つは，もちろん，旧来の都市から職人たちが農村地帯に移り住み，いまいった農民手工業の一翼に参加する，つまり，いわゆる《urban exodus》たったわけですが，そうした農村と都市の双方にわたる生産事情の変化に並行して現われていた「商業の衰退」もまたその重要な原因の一つでした。

中世期といえば，商の発達していたのはヨーロッパ各国であろうと想像していたからである。当然，イタリアなどの後塵を拝したであろうが，イギリスなども商は盛んであったろうと想像していた。しかし，イギリスでは，15 世紀あたりでは「商」は衰退していたということである。

この点の説明は，西洋中世史専攻の樺山紘一（2024）も行っている[22]。

また，綿花の栽培，紡績，製織の歴史を本にまとめたスベン・ベッカート（Sven Beckert）の大著『綿の帝国』によると，以下のようになる[23]。

（訳本，pp.60-61）

12 世紀には，ヨーロッパの一部の地域―特に北イタリア―が綿製品生産の世界に戻り，今回はそのままとどまった。ヨーロッパの気候は概してワタの生育に適さなかったものの，十字軍はヨーロッパの勢力をアラブ世界へと，それによってワタが自生する地域へと広げた。綿製品をつくろうとする最初の試みは控えめなものだった。だがそれは，やがてヨーロッパ大陸の歴史を，ひいては世界の経済を変えることになる潮流の始まりだった。

ヨーロッパにおける非イスラム綿業の最初の中心地は，ミラノ，アレッツォ，ボローニャ，ヴェネツィア，ヴェローナといった北イタリアの都市に現われた。こうした綿業は 12 世紀末から急速に発展し，これらの都市の経済においてきわめて重要な役割を担うようになった。たとえばミラノでは，1450 年には綿業において実に 6000 人もの労働者が雇用され，綿と亜麻をともに用いるファスチアン織りがつくられていた。これら北イタリアの人びとはヨーロッパの主要な綿製品生産者となり，ほぼ三世紀にわたってその地位を保ちつづけた。

（訳本，p.84）

ヨーロッパ自体の内部では，こうした経済空間の再編が大陸全域に影響を及ぼした。オランダ，イギリス，フランスといった「大西洋」列強が，ヴェネツィアやその後背地である北イタリアのようなかつての強力な経済地域の後釜に座った。大西洋貿易が地中海貿易に取って代わり，新世界が原料の有力な生産

地になると，大西洋とつながりのある諸都市もまた，綿織物の製造分野で技きん出た存在になった。実際，早くも 16 世紀には，ヨーロッパで拡大した綿織物製造業は，大西洋世界の全域―アフリカの綿布市場から，南北アメリカに新たに出現しつつあった綿花供給地まで―にまたたくまに広がった市場との結びつきに依存していた。ブリュージュ（1513～）やライデン（1574～）といったフランドル地方の都市で綿製品製造業が急成長するいっぽう，アントワープでは大規模な綿花貿易と海外への事業展開が始まり，巨大な新市場を利用できるようになった。同じ理由から，フランスの製造業者も 16 世紀後半に綿の紡績と製織の新事業に乗り出した。

2―1―3. フランスにおける中世の商

樺山紘一（2024）は，フランスにおける「中世期の商」を検討している[24]。

フランスでは国家が指導する

イギリスとならんで，もうひとつの敵手がオランダのまえにあらわれる。フランスである。フランスは，肥沃な農業国であり，オランダのような商業力をもつ機会にめぐまれなかった。

しかし，フランスは 17 世紀になって，べつの手段をもって，国際経済システムのなかに登場してくる。国家それ自身の経済政策によってである。それは世紀後半のルイ 14 世時代に，いっせいに開花した。財政総監コルベールの個性に帰されるところ多いこの財政策は，多くの成功をおさめている。

コルベール政策は，最初の国政主導型経済成長というべきであろう。道路，運河建設などの公共性のつよい事業をおこし，輸送，流通を拡大する。国内関税を撤廃するかたわら，輸入品には重い関税を課し，奢侈品製造をうながして，輸出利益をたくわえる。国内の弱い産業にかんしては，関税上の保護のほか，投資による育成，発展をはかる。民間の小企業，工場を援助して，工業力を増大させる。政府みずから，王立工場をもうけて，産業化への刺激をあたえる。のちに，名声を博するフランス特産品は，これによって誕生したものが多い。セーブルの陶磁器，ゴブランの絨緞織は，いずれもパリ郊外の王立工場でうまれ，また流行衣裳，香水なども奨励された。たちおくれた海外貿易のため，商社に財政援助をこころみた。

重商主義の道

こうしてイギリスとフランス両国は，べつべつの方式をとって，オランダの商衆力に対抗しはじめる。経済基盤をかためたイギリスも，さしあたりは，オランダの支配から身をまもるために，国内産業の保護を旨とする国家的政策をとって，商業利益を国民化しようとする。ふつう「重商主義」の名でよばれる政策であるが，このような国際経済の状況を背景として，典型的にあらわれる。イギリスとフランスばかりか，スペインやドイツ諸領邦が，あいついでその重商主義の国家政策をとるようになる。古風な商業力にたよってきたオランダは，これら重商主義の流行に圧迫されて，ついにヨーロッパ国際経済の主導役から，しりぞくことになる。

イギリスとフランスが，前面にあらわれる。しかしそのときはもう，18 世紀の扉がひらいていた。

2―1―4. フランスやイギリスに歴史書が生まれている

筆者は，こうしたフランスやイギリスの「商」の歴史が，モンテスキューの『法の精神』やアダム・スミスの『国富論』を生みだしたと考えている。「商」や「商人」の重要性を認識して書かれたものと考えられる。

ここで，モンテスキューとアダム・スミスとの対比を行ってみる。

（1）モンテスキュー（Montesquieu）：

フランスの啓蒙思想家。ボルドー近郊で生まれ，長じて法律家として高等法院に勤めている。執筆に 20 年かけたといわれる著作『**法の精神**』で，権力を立法・行政・司法に分割する三権分立論を唱えた[25]。

『法の精神』は，モンテスキュー 59 歳の作といわれ，商業（商）についての記述を多く見る。集中的に，第 4 部の第 20 編と第 21 編，そして，第 22 編がそれに相当する。

“commerce” 関係の考察が始まるのは，（第 4 部）第 20 編の第 1 章（pp.296-297）・第 2 章（p.297）。

モンテスキューは，歴史上の「商業の普遍性」について書いている。

> 商業は，ときには征服者によって滅ぼされ，ときには君主によって妨げられるが，地上全体に拡がり，抑圧されるところからは逃げ出し，息をつかしてくれるところで休息する。商業は今日では，かつて砂漠，海そして岩しか見られなかったところで隆盛している。商業がかつて隆盛していたところには砂漠しか存在しない。
>
> 今日，コルキスはもはや広大な森林にすぎず，そこでは日ごとに人口が減り，その人民はトルコ人やベルシア人に小出しに身売りをしてかろうじてその自由を守っているにすぎない。これを見ると，ローマ人の時代，この地方には数多くの都市があり，そこへ商業が世界中の国民を呼び集めていたなどとはとうてい言えそうもない。この国にはそれを示す事跡はなに一つ見出されない。その痕跡はプリニウス(1)とストラボン(2)の中にしかない。
>
> 商業の歴史は人民の交流（la communication des peoples）の歴史である。彼らのさまざまな崩壊，人口充満と荒廃との一定の交替は，商業史の最大の出来事を形作っている。

商業について（第 20 編第 1 章）

（訳本（中），pp.201-202）

これから述べる諸事項は，もっと範囲をひろげて取り扱われることが必要かもしれない。しかし，この書物の性質がそれを許さない。私はできれば静かな川面を滑ってゆきたいのだが，奔流に押し流されているのが実情だ。

商業は破壊的な偏見を癒す。そして，習俗が穏やかなところではどこでも商業が存在しているというのがほとんど一般的な原則である。また商業が存在するところではどこでも，穏やかな習俗が存在するというのもそうである。だからわれわれの習俗が，かつてそうであったほど残忍でないとしても驚くにはあたらない。商業はあらゆる国民の習俗についての知識がいたるところに惨透するような働きをなしたのである。人はこれらの習俗を相互に比較したが，そこから大いに有益な成果が出てきた。

商業に関する法律は，まさにこの法律が習俗を堕落させるのと同じ理由で，習俗を改善することができる。商業は純真な習俗を腐敗させる。これがプラトンの嘆きの種であった。商業はわれわれが毎日見ているように，野蛮な習俗を磨き，これを穏和にする。

商業の精神について

（訳本（中），pp.202-203）

商業の自然の効果は平和へと向かわせることである。一緒に商売をする二国民はたがいに相依り相助けるようになる。一方が買うことに利益をもてば，他方は売ることに利益をもつ。そしてすべての結合は相互の必要に基づいている。

しかし，商業の精神は諸国民を結びつけるが，同じように諸個人を結びつけるわけではない。

われわれのみるところでは，商業の精神の影響しか受けていない国では，あらゆる人間行動やあらゆる道徳的徳が取引の対象となる。人間性が求めるどんな小さな事柄でも，そこ

では金銭と引換えになされたり与えられたりする。

商業の精神は人間の中に厳密な正義についてのある感情を生み出す。この感情は一方で掠奪と対立し，他方であの道徳的徳，すなわち人に自分の利益を必ずしも執助に主張しないようにさせ，他人の利益をはかつて自分の利益を顧慮しないようにさせるあの徳と対立する。（訳本（中），p.202）

これと反対に，商業を全くなくしてしまうと，アリストテレスが獲得の仕方の一つとして数えた掠奪が出てくる。その精神はある種の道徳的徳とは対立しない。たとえば，客人厚遇は，商業国では極めて稀だが，掠奪国民の間では感心するほど見出される。

タキトゥスの言うところによれば，ゲルマン人のもとでは，知り合いであるかどうかにかかわりなく，どんな人間に対しても門戸を閉すことは漬聖行為である。ある外国人に対して客人厚遇を実行した本山山，彼に対してやはりそれを実行するもう一つの家を示す。そこでは彼は同じ人情味をもって迎えられる。しかし，ゲルマン人が王国を建てるようになったとき，客人厚遇は彼らの負担になった。このことはプルグンド族の法典の二つの法律に現れている。その一つは，外国人にローマ人の家を教えたすべての蛮民に刑を科しており，もう一つは外国人を迎える者は住民たちによって，各自の割当て分だけ補償されると定めている。

また，モンテスキューは，“économie”（経済）と“commerce”（商業）を区別している。（例えば，第 20 編第 5 章の表題「経済のために商業を行った国民について」（Des peuples qui ont fais le commerce d’économie.））

モンテスキューの経済“économie”は，国民経済の意味か，国の管理（やりくり）のことではないか，と考えられる。

川出良枝（1996）は，この“Mercantilisme”の意味について解説している[26]。

すなわち，モンテスキューは，商業に従事する人間を非道徳的な存在とは見ておらず，「商業の精神は，人間にある種の厳密な正義感を生み出す」と考えており，その結果，「商業国家」イングランドの繁栄に高い評価を下している，という。

（2）アダム・スミス（Adam Smith）

1923–1790（享年 67 歳），『国富論』出版は，53 歳の時と言われている[27]。

アダム・スミスは税関吏を父としてスコットランドの海沿いの町カコーディーに生まれたが，父は生まれる半年前に死亡した。生年月日は不詳であるが，1723 年 6 月 5 日に洗礼を受けたことは明らかになっている。未亡人となった母は，亡夫と同じアダムという名前を一人息子につけ，生涯愛情を注いだ。スミスは 4 歳の時にスリに仕立て上げることを目的とした誘拐に遭うものの，誘拐犯からスリには向かないという烙印を押され，解放されてしまうほど内向的性格を持ち，吃りがあった。

『国富論』は，The Fourth Edition（1776 年）で 2 巻に分かれて出版されている。大判，First Volume：510 頁，Second Volume：587 頁，合計，1, 097 頁。

ジェームス・バカン（James Buchan）（2006）の分析[28]：

語数：『国富論』：Ⅰ，Ⅱ合わせて，約 33 万語。スミスは，トータルで，100 万語書いているという。

（1）百万語のうち，見えざる手，の言葉は，3 回出てくるに過ぎない。

【訳本（p.8）】

（2）（自由放任主義）レッセ・フェールという言葉は一度も使っていない。

【同（p.9)】

（3）理論家は，歴史をすっかり無視するようになった。（筆者注：J.R. ヒックスがいる）　【同（p.11)】

（4）アダムの執筆していた世界には，現代的な経済はなかった。ローマ帝国に。近かった。　【同（p.12)】

（5）孤独を愛する，一度も結婚していない，ロンドンを初めて訪問したのは30代後半，海外には一度だけ，フランスとジュネーブに行っただけ。（筆者注：このとき，フランスでモンテスキューに会ったか？）。【同（p.21)】

（6）『国富論』中，釘が通貨として使われていた，という。　【同（p.25)】

（7）スミスはハチソンから受け継いだもの。人間は美醜を間違いなく見分ける美的感覚をもっているように，善悪を間違いなく見分ける道徳的感覚を生まれつきもっている。

【同（p.30)】

（8）マンデビルは「公益なるものが，すべて自己利益からなる」といった。道徳を非難し，低俗な功利主義を主張した。スミスは，自己利益にもとづく道徳観を嫌った。　【同（p.31)】

（9）人間には本来，秩序を好む気持ち，古典物理学の言葉を使うなら，「想像力にとってまとまりがある見せ物だと思えるもの」を好む気持ちがあり，この点が背景になって，科学的な研究だけでなく，技術や法制度，政治制度の進歩，イチイやヒイラギの木の刈り込み，室内の椅子の配置，さらには玩具の収集などへの情熱が生まれるという。　【同（p.41)】

スミスはグラスゴー大学の講義で，「とくに説明が難しいと考える現象がすべて，ある原理から導き出せることが分かれば，喜びが得られる」と語っている。

たとえば，古典物理学の土，空気，火，水という4元素のように，想像上のものに過ぎない原理や間違った原理すら，それなりに役立つという。

「これらの一般的な問題について，こうした原理がなかった場合よりまとまりのある形で考え，議論できるようになる」

ここで重要と考えられるのは，アダム・スミスの『国富論』の中に，モンテスキュー（Mr. Montesquieu）の名前が出てくる。（例えば，第1編第9章，訳本，p.171.），原著では，（Book Ⅰ, Chap.Ⅸ, (No.1)，p.118.）。

アダム・スミスは，モンテスキューの影響を受けているのではないか。この件から「見えざる手」の言葉を生み出したのかも知れない。

「経済学の父」と言われる，アダム・スミス（Adam Smith）は，1723年，スコットランドに生まれと推定されている。

その当時の背景を，J.M. ロバーツ（J.M. Roberts）は，イギリスの植民地戦争華やかかりし頃と書いている[29]。また，重商主義が盛んな頃であったと推定されるとしている。

（訳本，p.185）

中国や日本などアジアとの貿易は莫大な利益を生み出したので，どんな苦労しても十分報われることになったのです。経済的な利益と名誉心があいまって，1500年までには，かなりの回数の探検航海が行われ，東方貿易が飛躍するための環境が整えられていきました。……

17世紀初頭の時点で，イギリス人はすでに数十年もの間，植民に適した土地を新世界中で探しまわっていました。彼らは当初北米大陸に移住を試み，それから1620年代には西

インド諸島に最初の植民地を建設しました。
……
（訳本，p.230）

18 世紀末には，アメリカ大陸へのヨーロッパ人の入植が始まってから，すでに 2 世紀半がたっていました。……ただひとつだけはっきりしているのは，最終的にこの時代までに，アメリカ大陸に進出したすべての国が，植民地経営から何らかの経済的利益を得ていたということです。…
（訳本，p.234）

1776 年，北米大陸では植民地の暴動があいつぎ，7 月 4 日には独立宣言が採択され，大西洋沿岸の 13 州が本国イギリスからの独立を宣言することになりました。…フランスがインド亜大陸から撤退しています。世界史的に見て，18 世紀末というのは時代の大きな時代の変わり目となっているのです。1800 年になるころには世界規模での貿易網が出現していました。

こうした最中に『国富論』が世に出された。

経済学者の塩沢由典（1985）は，「商人論」がなぜ経済学から消えてしまったのか，について一つの見解を表明している[30]。

商人論は経済学からなぜ消えてしまったか。この問いに答えるには，すくなくとも二つの契機を指摘する必要がある。第一の契機はアダム・スミスの『諸国民の富』にまで遡る。

第四篇第二章において，いささか不用意に，著者が「見えざる手」ということばを使ったとき，不幸の種が播かれたのであった。

その当時の背景について，宇沢弘文は[31]，

もっとも，スミスが対象としていた社会は，産業革命直前の，マニュファクチャーの時代であって，近代的な大工場を中心とした生産様式はまだ未知のものであった。一つの職業と他の職業との分業，農業，工業，商業という分業形態，さらには農村と都市との間の分業というように，いわば社会的分業を問題とした。しかも，このような社会的分業が，今日の言葉を用いれば経済的合理性という観点から，それにたずさわる人々の内発的な動機にもとづいて自然発生的に生み出されたものであるという点にスミスの分析の焦点は当てられていた。

各学問では，人間概念が前提される。経済学では「経済人」，経営学では「経営人」であるが，商学では「商人」（merchant）である。

一方，「商人」という存在については，経済学や，経営学においても登場するし，各国の歴史研究においても必ず登場し，その存在の重要性が強調されている。

極端な話，「商人」は，各学問の中心的役割を担わせられていると言っても過言ではない。

たとえば，西洋における，モンテスキューの『法の精神』やアダム・スミスの『国富論』も，「商」や「商人」の重要性を認識して書かれていた。

二人とも著書の大部分が“commerce”（商）に関する記述で埋められている。しかし上記したように，経済学の父と言われるアダム・スミスから派生したと考えられる経済学では，商人や商はほとんど完全と言って良いほど消えてしまっている（一般均衡理論などへ引き継がれていった）。

その後，経済学の方で商や商人はどうなったのか。近代経済学でもほとんど表面には出てきていないとずっと感じてきた。門外漢には，演繹的論理や数式展開が目につく学問へ傾斜しているように見える。今日の例えば新古典派総合の経済学でも，かつて社会科学の中でももっとも美しい理論と言われた，〈需要の法則〉を説明する「無差別曲線の理論」や「リビールド・プレファレンスの理論」，「一般均衡理論」の延長線上で研究している

ように見える。

しかしながら，筆者が，20 世紀に入って経済学の方で，商やマーケティングとの関係を論じているものはないかと探していたとき，J.R. ヒックスの著書にぶつかった[32]。

ヒックスの『経済史の理論』（1969）の訳本に初めて接したとき（2009 年 9 月），筆者自身驚きを禁じ得なかった。早速，図書館で原書を借りてきて，訳本と対比させながら読んでみた。

本文も読み進んで行くうちに，後にみるごとく驚かされたが，特に，訳書の方の「訳者あとがき」が強烈なパンチであった。

> 『経済史の理論』が公刊された当時はまだそれほど明確であったとはいえないが，1965 年前後から『価値と資本』に代表されるそれまでのヒックス自身の著作を大きく修正ないし自己批判することがしだいに顕著となってきた（この点については，例えば根井雅弘『二十世紀の経済学・古典から現代へ』講談社学術文庫，1995 年，124–145 頁）。そのため，1972 年に「一般均衡と厚生経済学」に関する業績に対して，ヒックスにノーベル賞が授与されたことについて，ヒックス自身は「そこからすでに抜け出してきた仕事に対して栄誉を与えられたことについては，複雑な心境にある」と述べている。そして，ヒックスがこれまでの仕事から抜け出そうとする方向，すなわちヒックスの修正ないし自己批判の主要な方向は，「完全競争の仮定の一般的放棄」と「歴史的時間」の重視にあったのである。したがって，1969 年に公刊された『経済史の理論』は，まさに前期ヒックスから後期ヒックスへの転換を象徴する作品であったといって差し支えないであろう。
>
> 「ノーベル賞がこの仕事に対して授与されていた方が望ましかった」という思いを抱いている『経済史の理論』は，著者自身が述べているように，「小著ではあるがきわめて大きな問題を扱って」おり，空間的には「全世界にわたり」，時間的には「人類の全歴史過程」つまり「人類の最初の時代から，知られざる未来の発端である現在までを対象としている」。しかし，この書物はけっして経済史のすべての領域をカバーしているわけではない。
>
> ヒックスによると，経済史には二つの種類がある。第一の種類は，「生活水準」にかかわる経済史で，生活水準が「時間を通じてどのように変化し，また一つの住民，あるいはそのなかの一つの階級の生活水準が，同じ時点における他の住民や階級の生活水準とどのように違っているか」という問題を取扱い，大部分の経済史家が関心を寄せているものである。しかし，ヒックスは，この種の経済史の重要性は認めつつも，これには関心をもたない。ヒックスの関心は，第二の種類の経済史，すなわち「経済システムをつくり担っている人々，つまり「経済人あるいは経済計算を行なう人間の出現」，いいかえれば「より狭い意味における経済活動の出現」にかかわる経済史にある。
>
> そして，この第二の種類の経済史は，“経済人”が取引を行う場，あるいは「より狭い意味における経済活動が行われる場」，すなわち「市場」に主要な関心を寄せることになる。

とにかく，J.R. ヒックスは，ノーベル経済学賞受賞者であるが，あるとき「商人」に関する本，『経済史の理論』を書いて，こちらで，ノーベル賞をもらいたかったと述べていたという。その点は，訳本の「訳者あとがき」の中に出てくる，A. クラメールの論文を筆者も確認している[33]。

これまで交換や商が人間生活においてきわめて重要な位置を占めており，また，いろいろな問題を投げかけてきたことを見て来た。一般的に言えば，このような場合には，学問的に

枠組を形成して，その上で問題を根本的なところから考察する形で進めていくのが常である。

「商学」では，何をどのように研究するのかを考えた場合，これまでの検討より，「交換」，「商」，「取引」といった概念や概念間の関係が取り扱われることになりそうである。

ここでの「商（commerce）」を，取り敢えず「衡平を基礎とし，またそれを志向する人間およびその集団の相互交流，相互交換関係のことである」としておこう。

ところで，このように定義される商の歴史は，きわめて古いものとなる。それが交換や取引といった内容を含むことから，人類が社会生活を始めたときに遡ることになるからである。

やがて，商人も登場して，（売買）取引が盛んになるにつれ，取引の方法やトラブル防止のため商売に必要な知識も必要となり，「商学」の萌芽と見られるものがでてくる。

文献的には，10 世紀のアラビア人の商事記録にまで遡ることができると言われている。当時，貿易活動で巨富を積むことができたアリ・アド・ディミキスという人が，世界最古の商業学的文献として伝えられる「商業の美―善良な商品と粗悪な商品との弁識ならびに商品詐欺師の偽造に関する指針」という手記を遺した。要するに，アラビアの商人が，隊商を率いて国々をめぐって，商売を行うのに必要な諸知識を集大成したものであった。この種の手記は，その後，イタリア諸都市の商人によって数多く作られている。

例えば，14 世紀から 15 世紀にかけてのフィレンツェ郊外のトスカーナ地方の商人（フランチェスコ・ダティーニ）の書いた，15 万通にも及ぶ書簡（手紙や契約書）が，1870 年に発見されているし，1573 年に，コトルリによって編集されベネチアで発刊された『完全な商人の商業』は，１人の商人の手記である以上に，多数の記録を抜粋して，広く一般の読者のために公刊されたものであり，「完全な商人」という１つの理念を作り上げることに貢献するものであったと言われている。

また，1675 年に，商人が，商業を営む上で必要な諸知識の集大成として，ジャック・サヴァリー（Jacques Savary）の『完全な商人』がでている。

「ロビンソン・クルーソー」で有名なダニエル・デフォー（Daniel Defoe, 1660-1731）は，商人の子として生まれたこともあり，長じて『完璧なイギリス商人』を書き，商人の倫理基準を説いた。

イタリアのベネデット・コトルリ（Benedetto Cotrugli）は，1458 年に『商売術の書』（Libro de l'alte de la mercatura）を書いている[34]。

これには，商人に必要とされる資質，商売に適した諸条件，複式簿記に関する記述，商人の負わねばならぬ宗教的義務，商人の市民生活について，商人の商売上の徳について，商人の引退の時期，などが書かれていたとされている。

〈以下，後編へ続く〉

（前編の）注と参考文献：

（１）増田四郎（2021）『ヨーロッパ中世の社会史』，講談社学術文庫。
（２）阿部謹也（2004）『日本人の歴史意識―「世間」という視角から―』，岩波新書，pp.4-15。
（３）寺西重郎（2014）『経済行動と宗教―日本経済システムの誕生―』，勁草書房。
（４）本郷和人・島田裕巳（2024）『鎌倉仏教のミカタ―定説と常識を覆す―』，祥伝社新書。

また，貨幣経済と仏教との関係について二人の会話がある。
（pp.179-181）
本郷　鎌倉時代を通して，日本各地に貨幣経済が浸透していきます。その過程で土倉と呼ばれる層が寺社勢力から現れ，金融を担うようになりました。その中心が比叡山（延暦寺）で，言わば中央銀行のポジションを占めます。
　そのようななか，武士たちは自分たちの経済担当の役割を，禅宗の僧侶に求めるようになります。それが室町時代の京都五山（別格として南禅寺。

天龍寺，相国寺，建仁寺，東福寺，万寿寺〔いずれも京都市〕）の確立につながっていきます。本郷恵子さんによれば，室町時代になると中央銀行の役割は比叡山から禅宗に移っていくそうです。

島田　室町時代には，日明貿易の担当者としても僧侶が活用されますね。

本郷　貿易もそうですし，いわゆる外交官の役割も担いました。国内でも二者の利益が相反するところでの調停役として禅宗が登場しています。古来，僧侶が外交を担う伝統がありましたが，室町時代からは禅宗の僧侶の動きが目立つようになるのです。

禅僧の役割：

島田　鎌倉時代の段階では，外交・政治面における禅僧の役割はどの程度だったのでしょうか。

本郷　正直なところ，鎌倉時代の禅宗はそれはどの存在感はなかったと思います。中国から来た蘭溪道隆が建長寺を，無学祖元が円覚寺（神奈川県鎌倉市）を開きました。しかし，彼らの弟子の系譜は，室町時代につながっていません。室町時代に活躍するのは，後醍醐天皇に国師号を贈られた夢窓疎石（1275～1351 年）の弟子たちです。

要するに，鎌倉時代に“でかい顔をしていた”禅僧は渡来僧とその弟子で占められていた。しかし，南北朝時代あたりからその顔ぶれが変わり，新たな流れが出てきたということでしょう。

鎌倉時代の武士たちの知的水準にも，問題があったかもしれません。承久の乱において，幕府軍が京都を制圧した時，後鳥羽上皇は北条泰時に文書を遣わします。文書を受け取った泰時は背後の武士 5000 人に「この文書が読める者はいるか」と尋ねたところ，ひとりだけが進み出て文書を読んだということが『吾妻鏡』に記されています。つまり，泰時を含め，字が読める者がほとんどいなかったのです。

確かに，北条時頼は，中国から来た僧侶たちも認めるほどの理解力を持っていました。しかし時頼が亡くなると，几庵普寧は帰ってしまいます。後継者の時宗が凡庸だったという事情があったのかもしれませんが，鎌倉時代の武士たちは，まだ深いコミュニケーションができない段階だったのかもしれません。道元も鎌倉に呼ばれますが，半年ほどで帰っていますね。

室町時代になると，武士たちも教養主義に傾斜していきます。歌を詠んだり，政治を勉強したりします。結局のところ，平安時代の貴族のライフスタイルを，武士たちも後追いしていくわけです。同様に，禅への傾斜が強まっていくのも必然だったと思います。

（5）鈴木大拙著（上田閑照編）（2010）「東洋的見方」『新編・東洋的な見方』，岩波文庫，pp.15-28。

何かの因縁だろうが，自分は「東洋的見方」ということを強調したくでしょうがない。これを今時の西洋的，科学的，論理的，概念的などいうものに対抗させて，東洋民族はいうまでもなく，欧米一般の人々にも，広く知らせて，東洋文化の意義を高揚したいのである。そうしてこれを，これから来たるべき世界文化なるものを造り上げるに，一役つとめさせなくてはならぬというのが，自分の主張なのである。

東洋的見方のうちで，最も特徴ありと認むべきは禅である。この禅を，今までの様式そのままで，これからも広く世に行なわせるべきかどうかは，問題であろう。が，一応はまず何が禅かということを，できるだけ平易に説き明らめるのが，自然の順序である。

（6）阿部謹也（2004）『日本人の歴史意識―「世間」という視角から―』，岩波新書，pp.4-15。

日本には「世間」があり，欧米にはない。欧米では 12 世紀以降「個人」がうまれ，日本には明治維新後に欧米の思想や技術と一緒に「個人」も入ってきた。この場合，日本では個人が世間に拘束されており，欧米にはないものである。

（7）阿部謹也（2010）『ヨーロッパを見る視角』，（2006 年初版），岩波書店。

（8）空海の密教は，現世の問題（自己の力を存分に発揮すべし）

（9）Ruth Benedict（1946），*The Chrysanthemum and Sword—Patterns of Japanese Culture*, Boston.（ルース・ベネディクト（長谷川松治訳）（2020）『菊と刀―日本文化の型―』，講談社学術文庫。）

（10）平川克美（2024）「お金で買えないものはあるのか？」『現代思想』，2024 年 1 月号（Vol.52-1），pp.221-230。

貨幣経済の最も重要な条件は二度目の交換

今日の貨幣論では，物々交換から発展して，万能のツールである貨幣が登場し，一挙に交換が加速されていったという説はかなり分が悪い。文化人類学者が教えるところでは，実際に物々交換が社会に行き渡ったような例は歴史上存在していない。ハミルトン・グリァソンやカール・ポランニーが指摘するように，原始社会の交換様式は沈黙交易であり，マルセル・モースが書いているように贈与交換こそが歴史上観察される交換である。交通手段や，運搬手段が未発達の地域において，食料や水といった財を地域全体に行き渡らせることは，その地域に生活するものが生き延びてゆくためには重要なことであり，誰かが蓄財してしまえば，部族社会の生存そのものが脅かされかねず，部族社会の権力構造にも大きな影響を与えざるを得ない。それを避けるためには，人間の頭数に対して，希少な財を均等に分配する必要があった。

（11）大月康弘（2024）『ヨーロッパ史―拡大と統合の力学―』，岩波新書，pp.200-204。
（12）阿部謹也（2017）『中世の窓から』，ちくま学芸文庫，pp.260-262。

11 世紀における富者は，モノを配る代わりに大聖堂を建立し，その行為によって社会的尊敬を集めたのです。このような筋書きは，教会を通しての彼岸における教いの保証というキリスト数的彼岸信仰によって，はじめて有効になるわけですから，贈与慣行の転換に当って，教会は絶大な役割を果たしたことになり，以後 15，6 世紀にいたるまで，ヨーロッパ中世社会はキリスト教世界としての実態を整えてゆくことになります。

他方で，商業活動を通して大量の財貨を集め，従来の贈与慣行からみれば恥ずべき行為をしているといううしろめたさは，教会への寄進によって相殺され，人びとは安んじて商業活動に専念できるようになり，こうして，いわゆる中世都市文化の聖と俗との両極を結ぶ特異な構造が形成されてゆくことになったのです。

（13）桜井英治（2019）『交換・権力・文化―ひとつの日本中世社会論―』，みすず書房，pp.29-30。
（14）鈴木安昭・田村正紀（1980）『商業論』，有斐閣新書，p.12。
（15）深見義一（1971）「マーケティングの発展と体系」『現代経営学講座 6 』（古川栄一・高宮晋編），pp.3-16。
（16）増田四郎（2021）『ヨーロッパ中世の社会史』，講談社学術文庫，pp.195-211。

要するに，十二世紀を転期として，麻織物・毛織物・葡萄酒・穀物等々，特産物化の傾向が現れ，都市と農村の有機的な関係ができるとともに，物資流通のシステムが，だんだんと全ヨーロッパに拡大し，ヨーロッパが単一価格体系の場となるというのが，東ヨーロッパとくらべての西ヨーロッパの特色であります。東ヨーロッパでは，市場への窓口を閉ざされた村落であり，価格体系の不明な外地の奢侈品が，いわば農村の頭越しに，貴族階層の需要のために流通する，という傾向が圧倒的に強いのであります。

そこで経済史家たちが，こうした西ヨーロッパの状況をどういうふうに見てきたかということを，十一世紀ないし十四世紀の把え方の問題に結びつけて申し上げてみたいと思います。ご承知の方が多いだろうと思いますが，従来の経済史の概説書では，この時代の経済状態を，「都市」経済の段階として規定してきました。その意味は，封建諸侯が，自分の領域全体の経済の発展を促進させるような政策をまだ自覚していない。別の言葉で言いますと，経済主体というものは，あくまでも都市自治体であるという，そういう状態でありますため，このように規定したのであります。

この把え方にはそれ相当の理由があるのでして，「国民」というものが経済主体になって経済政策が行われ，国民の富を増やすための諸政策が行われるという段階を「国民経済」と呼ぶのと，相呼応しているのです．すなわち，国民経済が出現する前段階を都市経済と考える。一部の論者は，都市経済と国民経済の中間に，「領邦経済」の時代を考えますが，三段階説をとる人は，封鎖的な家族経済・都市経済・国民経済というふうに分けるのです。

（17）玉木俊明（2023）『商人の世界史』，河出新書。

イタリアでなぜルネサンスが生まれたのか

周知のように，ルネサンスはイタリアで生まれた。その先駆的業績として，ダンテ（1265-1321）の『神曲』がある。

『神曲』は，14 世紀初頭，当時のヨーロッパの共通文章語のラテン語ではなくイタリア語（正確にはフィレンツエがあったトスカーナ地方の方言）で書かれた。この作品は，地獄，煉獄，天国の三部に分かれ，地獄で苦しんでいるのが，イスラーム教の創始者であったムハンマドである。これは，ダンテのイスラーム教に対するかなり大きな偏見を示しているのかもしれないのだ。

当時，十字軍遠征そのものは終わっていたものの，その影響は，まだ残っていたと考えるべきであろう。ダンテには，十字軍によりもたらされたイスラーム世界についての記憶が，ありありと残っていたのかもしれない。イスラーム教の影響は，当時のイタリア，地中海世界，さらにはヨーロッパ全体で強かったとも考えられよう。

ルネサンスとは，「再生」「復活」などを意味する言葉であり，古典古代（ギリシア，ローマ）の文化を復興しようとする文化運動だとされる。この定義からは，イスラームの影響は感じられない。

現在の研究では，たとえばヴェネツィアの建築に，オスマン帝国の影響がありありと見てとれるとされている。地中海は，広大な異文化間交易圏の一部であり，ルネサンスがはしまった頃には，カトリックと東方教会，そしてイスラーム教徒の海であった。イタリア人が古典古代を理想としても，現実には，より文化的にすぐれていたイスラーム世界の影響があったと考えるのは，理にかなっていよう。

イタリアは，強力なイスラーム諸国に直面することで，文化水準を高めていったのだろう。しかし，彼らが理想化したのは，イスラーム教ではなく，古典古代であった。

おわりに―ヨーロッパを超えて

ルネサンスの起源はイタリアにあった。イタリアは長期間にわたり，ヨーロッパ人の憧れの対象であった。おそらくルネサンスには，イタリアの中間商人の活躍が関係していた。イタリア商人はレヴァント貿易で，また，香辛料貿易で活動していた。レヴァント貿易に

おいても香辛料貿易においても，イタリアはオスマン帝国に対しては従属的関係にあった。中世から近世にかけてのイタリアは，地中海世界最大の中間商人であったが，彼らが活躍できたのは，ヨーロッパ内部にかぎられていた。

セファルディムはイベリア半島から追放されたユダヤ人であり，新世界からインドに至る広大な交易圏を有した。それだけではなく，地中海商業においても活躍したことは，これまで見た通りである。

イタリアのリヴォルノに住んでいたセファルディムでダイヤモンド貿易に従事した人たちは，地中海のサンゴをインドのゴアに輸出し，ゴアのヒンドゥー教徒が，ダイヤモンドをリヴォルノに輸出していた。

そして，契約文書は基本的にポルトガル語で書かれた。リヴォルノでダイヤモンド貿易に従事したユダヤ人は，ポルトガル出身だったからだ。このような国際貿易のなかで中間商人としてもっとも活躍したのは，セファルディムであった。それが，この時代の国際商業の実態だったのである。

アルメニア人はソグド人と同様，さらには彼ら以上の規模で，ユーラシア大陸の商業で活躍した。ユーラシア大陸の陸上ルートでの商業活動において，一番活躍したのは，アルメニア人であった。

世界の商業が拡大すると，中間商人の役割も拡大した。彼らは，地域と地域，ヒトとヒトを結びつけた。地中海商業は，このような大きな商業ネットワークのなかで見ていくべきである。すなわち，新世界から地中海，インド洋，東南アジアの諸海，ユーラシア大陸，さらには東アジアに至る広大な異文化間交易圏の一部として機能したのだ。そのなかで，中間商人として際立った役割を果たしたのが，セファルディムとアルメニア人であった。

彼らと比較すると，イタリア商人の役割は，あまり大きなものではなかったのだ。

（18）小林功・馬場多聞編（2021）『地中海世界の中世史』，ミネルヴァ書房。

経済的に豊かで自立した都市部の中では，文化活動も活発化し 14 世紀頃からイタリアは本格的なルネサンス期に入った。

またこの問，イスラーム地域との交易も活発に行われていた。12 世紀末にイベリア半島南部からメッカに巡礼したイブン・ジュバイル（1145 年生–1217 年没）は，早くも往路・復路ともにジェノヴァ船を用いていた（第 6 章参照）。ムワッヒド朝末期から，アンダルスではアンダルス商人の船が往来することは少なくなり，代わってジェノヴァ商人をはじめとするキリスト教徒の船舶が大きな役割を果たすようになっていく。中世後期のナスル朝グラナダ王国では，ジェノヴァ人は一層重要な役割を果たす。彼らはサトウキビや乾燥果実，絹などをグラナダ王国で買い付け，代わりにイングランドやフランドルの毛織物や東方の香辛料をもたらした。また，ナスル朝のマグリブからの穀物輸入もジェノヴァ商人が担っていた。ジェノヴァはレヴァント貿易でも大きな役割を果たしている。

（19）ゲーテ著（相良守峯訳）（2008）『ファウスト』（第 2 部・第 5 幕），岩波文庫，p.436。

（20）岩井克人（1985）『ヴェニスの商人の資本論』，筑摩書房。

（21）大塚久雄（1968）「イギリス経済史における 15 世紀」『日本の最終講義』，KADOKAWA，2022 年，pp.95–120。

（22）樺山紘一（2024）『ヨーロッパの出現』，講談社学術文庫，pp.179–181。

イギリスの底力

イングランドは，17 世紀の冒頭，ステュアート朝の成立とともに，スコットランド王国と同君連合をむすんで，両国統合へとむかうので，ここからあとはあわせてイギリス王国と，よぶことにしよう。繁栄の十六世紀に，イギリスはまだ経済的には後進地域であった。スペイン，オランダの海外貿易にならって大西洋に進出し，しばしばその先縦者に，海上略奪をかけたが，それにとってかわることはできなかった。

しかし，イギリスはオランダとは逆に，16 世紀の経済環境を，国内経済システムの変換に利用する。力をつけてきた農民のなかには，領主の網をきって自営化するものもあらわれた。農民のうちには，富裕なものと貧困なものが分化したわけだが，この分化によって連帯が失われたとき，領主のほうは弱い農民をねらいうちにして，収益をあげることに，成功した。牧羊がとりわけ，その収益増大にやくだった。「羊が人間を喰いころす」というトマス・モアの警句は，16 世紀のこの事態をあらわしている。ことに，上地経営に意欲をしめした下級の貴族領主が，経済力をつけてゆき，富農や商人をもまきこむという，大きな変動かおこっていた。

このイギリス経済は，当初，羊毛を低地地方に輸出するだけの，原料供給地という地位に甘んじ，国際経済システムに従属していたが，やがて独自の道をさぐりはじめる。経済の革新者たちは，ついに，みずからの手で羊毛を製品にしあげる方式を身につける。自営でゆたかになった農民や，中小の領主が，牧羊他のただなかで，毛織物の織機をすえつけ，稼動させる。農村工業とよばれる，あたらしいタイプの経済力がうまれ，羊毛はいまや，大陸に輸出されず，国内のちいさな仕事場にわたされて，布地に織りあげられる。そればかりか，都会でも衣料品や石鹸など，こまごまとした消費物資が生産されて，国内の経済力を増進した。

イギリスがオランダに対抗するやり方は，このように，オランダには欠けていた，中居で中核をなす国内経済の革新者をつくりだすことであった。力をつける

下層貴族は，たとえばジェントリーとよばれ，自営農民はヨーマンリーと称される。これに，都市の商人たちが参加して，イギリスの経済はすっかり顔容をかえてゆく。この経済力を背景として，イギリスの国家が，オランダとわたりあったとき，アムステルダムの隆盛にも，暗い影がさしはじめヨーロッパの貿易支配をめぐって，さらには，海外植民地について，また両国の抗争が勃発する。十七世紀のなかばから，後半にかけて，経済権益をかけた戦争が，続発する。オランダ人が，北アメリカ東岸，ハドソン川口に造成した植 SSS 民拠点，ニューアムステルダムが，戦闘のすえイギリスに譲渡されたのは一六六四年，たいそう象徴的な事件である。その町は，イギリスの旧都の名をうけて，ニューヨークと改名される。両国のつばぜりあいは，17 世紀をとおして継続されるとはいえ，勝負のゆくえはあきらかだった。国際経済システムの核心の地位は，アムステルダムからロンドンへと，うつっていった。

（23）Beckert, Sven (2014), *Empire of Cotton: A Global Histry*, Penguin Random House, LLC.（スヴェン・ベッカート著（鬼澤 忍・佐藤絵里訳）(2022)『綿の帝国』，紀伊國屋書店。)。

（訳本，pp.60-61）

12 世紀には，ヨーロッパの一部の地域―特に北イタリア―が綿製品生産の世界に戻り，今回はそのままとどまった。ヨーロッパの気候は概してワタの生育に適さなかったものの，十字軍はヨーロッパの勢力をアラブ世界へと，それによってワタが自生する地域へと広げた。綿製品をつくろうとする最初の試みは控えめなものだった。だがそれは，やがてヨーロッパ大陸の歴史を，ひいては世界の経済を変えることになる潮流の始まりだった。

ヨーロッパにおける非イスラム綿業の最初の中心地は，ミラノ，アレッツォ，ボローニャ，ヴェネツィア，ヴェローナといった北イタリアの都市に現われた。こうした綿業は 12 世紀末から急速に発展し，これらの都市の経済においてきわめて重要な役割を担うようになった。たとえばミラノでは，1450 年には綿業において実に 6000 人もの労働者が雇用され，綿と亜麻をともに用いるファスチアン織りがつくられていた。これら北イタリアの人びとはヨーロッパの主要な綿製品生産者となり，ほぼ三世紀にわたってその地位を保ちつづけた。

（訳本，p.84）

ヨーロッパ自体の内部では，こうした経済空間の再編が大陸全域に影響を及ぼした。オランダ，イギリス，フランスといった「大西洋」列強が，ヴェネツィアやその後背地である北イタリアのようなかつての強力な経済地域の後釜に座った。大西洋貿易が地中海貿易に取って代わり，新世界が原料の有力な生産地になると，大西洋とつながりのある諸都市もまた，綿織物の製造分野で技きん出た存在になった。実際，早くも 16 世紀には，ヨーロッパで拡大した綿織物製造業は，大西洋世界の全域―アフリカの綿布市場から，南北アメリカに新たに出現しつつあった綿花供給地まで―にまたたくまに広がった市場との結びつきに依存していた。ブリュージュ（1513～）やライデン（1574～）といったフランドル地方の都市で綿製品製造業が急成長するいっぽう，アントワープでは大規模な綿花貿易と海外への事業展開が始まり，巨大な新市場を利用できるようになった。同じ理由から，フランスの製造業者も 16 世紀後半に綿の紡績と製織の新事業に乗り出した。

（24）樺山紘一（2024）『ヨーロッパの出現』，講談社学術文庫，pp.181-183。

（25）Charles Louis de Secondat Baron de la Brède et de Montesquieu (1748), *De l'esprit des lois*.（モンテスキュー著（野田良之他訳）(2008)『法の精神（上）（中）（下）』，岩波文庫。）

（26）川出良枝（1996）『貴族の徳，商業の精神―モンテスキューと専制批判の系譜―』，pp.249-251。

（27）Adam Smith (1776), *An Inquiry in to the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, The Fourth Edition, London.（アダム・スミス著（2000）『国富論（1）（2）（3）（4）』，（第 5 版（1789 年）の訳），岩波文庫。）

（28）Buchan, James (2006), *The authentic Adam Smith: his life and ideas*, W.W. Norton & Company.（ジエイムス・バカン著（山岡洋一訳）(2009)『真説 アダム・スミス―その生涯と思想をたどる―』，日経 BP 社。）

（29）Roberts, J. M. (1976), *The Making of the European Age*, Duncan Baird Publishers Ltd, London.（J.M. ロバーツ著（鈴木 薫訳）(2003)『世界の歴史 6 ―近代ヨーロッパ文明の成立―』，創元社。

（30）塩沢由典（1985）「市場の見える手」『現代思想』，Vol.13-11，pp.116-130。

（31）宇沢弘文（2017）『人間の経済』，新潮新書，p. 23。

（32）Hicks, John R. (1969), *A Theory of Economic History*, Oxford University Press Paperback.（J. R. ヒックス著（新保博・渡辺文夫訳）(1995)『経済史の理論』，講談社学術文庫。）

（33）Klamer, Arjo (1989), An Accountant Among Economists: Conversations with Sir John R. Hicks, *Journal of Economic Perspectives*; Fall 89, Vol. 3 Issue 4, pp. 167-180.

（34）アレッサンドロ・ヴァグナー編（伊藤博明訳）(2021)『世界初のビジネス書― 15 世紀イタリア商人ベネディット・コトルリ 15 の黄金則―』，すばる舎。